

柳田雑記 (3)

～中国紅軍に寄り添う朱徳將軍の伝記 (2)～



中国紅軍に寄り添い朱徳將軍の伝記「偉大なる道」を書いたアグネス・スドレー。

マッカーシーせん風でアメリカを追われ、ロンドンで客死した。長らくアメリカで暮らした石垣綾子はスドレーと懇意だった。1930年代、アメリカニューヨークには彼等が集う左翼社会があった。中国の赤い星をかいたエドガー・スノウ等

石垣綾子のエッセーではスドレーが入院するとき最後の言葉を書きのこしている。

「わたしはただ一つの信念、ただ一つの忠節に生きてきた。そしてそれは貧しく、虐げられた者の解放であった。その骨組みのし一つとして、中国の革命が成功したのだった。」と書いてある。また自分の骨は中国に埋めてほしいとかいている。

スドレーの遺言どうり、スドレーの墓は、北京郊外にあるという。

ヒットラーのドイツになってから、彼女は「マンチェスターガーデアン」誌の特派員になったが、彼女の活動地帯は、いつも前線で、中国の解放軍と共に、奥地を何千里と歩き、革命の苦しい過程の中を中国人と同じ食べ物を食べ、行軍し、かたい床に眠り、彼らの怒りと、苦しみと、よろこびをともにしてきた、

そうした中で知った朱徳の生涯をスドレーは、ヤド(アメリカニューヨーク郊外の芸術村のコロニー)で書いたのだった。

このような時期に石垣綾子は、スドレーと親しく往来するよーになり、朱徳伝の感想を言ったりしていたが、1949年の夏、インド政府の高官から、インド政府の顧問として、スドレーを迎えたいという手紙がきた。しかしこれは本人の意思と、ヤドに居た作家たちの意見で行かないとなった。

1947年頃から、アメリカの対中国政策は、大転換し始めた。新しい中国への同情は、次第にうすくなり、目にみえぬ圧迫の影が、反蒋介石の立場をとる中国専門家の上に忍び寄ってきた。スドレーの新聞、雑誌への寄稿や、講演は少なくなりはじめた。彼女のいたヤドには、FBIのスパイが潜り込んできた。スドレーはそこをおわれるように立ち去って友人の家に身を寄せるようになった。

ところが1949年の2月、突然に、彼女の名は「ソ連のスパイ」という汚名きせられ、センセーショナルなヘッドラインに現れた。彼女はゾルゲ事件のスパイ団の一人というのである。彼女はこ

の挑戦に対して、勇敢に戦った。彼女をスパイといいだした陸軍当局は、取り消し文を公表し、スパイ呼ばわりを引っ込めた。だが、その取り消し文は、新聞の隅の方に小さく掲載されただけで、一度ひろがったスパイの名は消えさらなかった。

アメリカのアジア政策の変更と共にマッカーシズムの気狂いじみた「赤狩り」が始まっていた。

国賓として招待されたネール首相の身边に覆面の男が付きまとった。

電話の会話の控えを撮り、訪問客の名前を撮り、手紙を闇にほうむった。

ネール首相の出発の日が明後日に迫っていたけれども、無理な時間を割いてメドレーから、中国の内情を聞きたいというのだった。

その年の秋、彼女は未完成の「偉大なる道」をかかえて、イギリスに渡った。

この本が完成され次第彼女は中国にいくつもりだったのだ。

スメドレーは1950年、5月6日、胃潰瘍の手術の経過が思わしくなく、この世を去った。

私は若い頃、岩波から出版されたスメドレーの「偉大なる道」を読み、中国革命に敬意をいただいた。

紅軍の事実上の創設者である朱徳が毛沢東と出会うと彼の後ろに一步身をひき、それは時に毛沢東をいらだたせた。中国革命の過程をこれほど見事に描いたものは他にない。ロシア革命のように、第1次大戦の混乱のなかで一気加勢に成立した革命と異なり長い年月をかけて、反革命蒋介石軍と戦い、日本帝国主義を追い出して成就した中国革命は朱徳をはじめ、周恩来、劉少奇、鄧小平ら多くの優れた人材をようし、簡単には崩壊しなかった。毛沢東の文化大革命で多少の揺らぎはあったが中華人民共和国は崩壊しなかった。ソ連が崩壊した今、社会主義を目指す国は、中国、ベトナム、キューバである。

ベトナムはホーチミン、ポーゲンザップ等、キューバにはカストロ、ゲバラ、ラウル・カストロ等グラマ号の82人がいる。